



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道帝国大学における中国人留学生の留学生活
Author(s)	許, 晨; Xu, Chen
Citation	北海道大学大学文書館年報, 6, 42-52
Issue Date	2011-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/45214
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARHUA6_003.pdf



< 論 文 >

北海道帝国大学における中国人留学生の留学生活

許 晨

はじめに

「北海道帝国大学の中国人留学生」(『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月、27-63頁)では、北海道帝国大学における中国人留学生受け入れ制度の展開過程を分析した。本論文では、留学生の学業実態及び日本人教師、学生との親交・交遊を検討する。

従来の研究は、日本政府が親日感情を育成するため、如何に積極的に日本語教育を行い、帝国の価値観を移出するかの一辺倒であったことを強調している。しかし、北海道帝大では、九州帝大の留学生特別教育事業や東北帝大の中華民国学生特別講習会のような、留学生を対象にして日本語と日本政治史・文化史などを教える事例が見られなかった。さらに以下で見ていくように、留学生は受動的に教わっただけではなかったのである。

もう一つ解明すべき問題は、中国人留学生と革命運動との関係である。これについては既に多くの先行研究が蓄積されてきたが、扱う対象はほとんどが著名な人物または東京で活躍した留学生団体である。北海道という東京から遠く離れ、本州の風土とも異なる地方にいる留学生はどうであろう。彼らは、日本という異文化社会にどの程度、接触する機会を持つことができたであろうか。本論文は、同窓会誌¹⁾と北海道帝大學生課の日記などの史料をもとに、札幌の留学生とほかの地域や集団との繋がりを念頭に置きながら、北海道帝大中国人留学生の実態に近づくことを試みる。

なお、本論文で「北海道帝国大学」(略記「北海道帝大」)という場合、前身校の札幌農学校、東北帝国大学農科大学を含む。

第1章 留学生の勉学実態

日清戦争をきっかけとして、日中両国の文化的地位が逆転した。札幌農学校は草創期に多数の留学生を欧米に送り出したことがあるので、清国からの留学生も歓迎した。札幌農学校農芸科同窓会誌『農友』は、清国留学生が入学したことにより、「我農芸科は日本否東洋第一の中等実業学校」であることが「認め」られたと評価している²⁾。呉超と屠師韓のための入学歓迎会では、農芸科三年生浦上時造が漢文で、将来母国の役に立つことは農学校の名誉にもなる³⁾と歓迎の詞を述べている。農学校の期待は勿論名誉のみではない。日本留学の動機は「日清戦争以来清国は大に警醒して好を我国に求」め、「北清事件以后

は更に進で我国の文明を輸入せんと」するところにあったと認識している。留学生に開拓の知識を教えることは農学校なりの文明移出方法であり、北海道の開拓にも実際的な利益をもたらすとも考えられている⁴⁾。1905年1月発行の『文武会会報』は

諸氏よ諸氏が本国は廣大拓けば穰り掘せば黄金も炭も湧くべし諸氏が本邦にありての勤学蘊蓄は待つに国土開拓、以て同じく東洋の国民として欧米の文化と戦はんとするにあり他日諸氏篤学業了へて帰朝の時満洲の野血に肥えたるの時黄金の花咲き文化起つて燦然たらば豈に諸氏が功にして他なけんや諸氏勤学一番せよ

と清国留学生を激励している⁵⁾。

留学生はその期待を受け止めていた。1904年10月8日、山東留学生12名の代表が、谷井恭吉農学士、農友会会頭南鷹次郎博士、副会頭尾泉良太郎農学士も含めて「百二十有余名」が参加した歓迎会で、清国の落後と「日本実業の進歩」とを対比して、日本に対して感銘の情を示した。また、「然れ共又特有産物なきにあらざれば貴国人も弊国に來たり相共に斯業の發達を図らば、日清両国の交通益々頻繁となり両国の和親亦益々密なるに至らん」と述べており、貿易を通して両国の関係を深めようとの考えは日本側の認識と一致している⁶⁾。彼らが「勇氣ある人」「同胞」「有為の清人」とされ、清国が「友邦」とされた理由はその認識にあったと考えられる⁷⁾。

この時期の留学生は日本語が未熟な者が多かった⁸⁾。しかし、日本人学生と漢文を使ってコミュニケーションをとることはできた。入学した時は五十音を書ける程度の日本語しかできなかった屠師韓は、その後日本人生徒とよく一緒に遠足するほどの仲となった。彼は、「同窓農友会会報」に漢詩を寄稿し、農学校を北海道の開拓の「原動力」と賛美し、留学生として「清国開發之原動力」となるように努力するとの抱負を述べた。そして、札幌という窓口を通して、農業における英米の先進技術を知り、その感激を同窓会誌に掲載している⁹⁾。彼が後に吉林省農事試験場で仕事をするのは、北海道庁真駒内種畜場での体験に影響されたこともあるだろう。

中国人留学生は先進的な技術を学び、国に持ち帰ろうとするために北海道帝大に來たのと言うまでもない。

しかし、留学生は受動的に教わっただけではなかった。中国は日本に対して下位になっているが、就職などの関係で、中国に関心を持つ学生は少なくない。留学生の存在が、日本人学生に、満蒙も含めた中国の実態に対する認識を深める契機を与えた。

1907年9月11日、東北帝国大学農科大学の開学式で、佐藤昌介学長は「学科の増置と共に諸般の設備を完了し内外相待て益々其特長を發揮し遠く海外より留学生の來るあり又卒業生の供給殆ど其需要を充たす能はざるの勢なり」と、留学生の到来を大学の發展と関わらせて述べて、将来に対する期待を示している¹⁰⁾。農科大学は、北海道の「拓地殖民事業を翼賛」から「膨脹的帝国の鴻図を翼賛」へと轉換した¹¹⁾。北海道帝大時代には、毎年の夏休みに満鮮旅行団を組織し、最初は朝鮮・満洲の戦跡、次第に都市文化・農場・工場に

移り変わり¹²⁾、1932年ごろから、視察の重点が満洲国に移った¹³⁾。同年9月下旬に学生満蒙研究会が発会し¹⁴⁾、「満蒙の諸事情並に東亜を繞る世界の趨勢を批判、研討」する趣旨を掲げている。そして、1933年11月より、満蒙研究会が主催する「満洲語」(中国語)講習会では、満洲国留学生が講師を担当することとなった¹⁵⁾。ほかの帝大が行う中華民国留学生を教育対象とする日本文化講習と異なり、北海道帝大は満洲国の開発を自らの「使命」と考えたため¹⁶⁾、逆に満洲国留学生に教を請うこととなった。講習会は聴講者から学費を徴収せず、ラジオ講座のテキストを使い、週に1回1時間半の授業を行い、春休みも休まずに長く続けられたのである。聴講者は学生のみならず、大学の職員も積極的に参加した¹⁷⁾。

日中戦争勃発後、中国各政権の留学生は頻繁にマスコミから「親日」のレッテルを貼られた。大学当局も意識的に、日本人学生が留学生に友好的であるように働きかけた。1939年蒙古聯盟自治政府より派遣された留学生が到着した日、曾我孝之予科教授が予科生150名を引率して札幌駅に出迎えた。『北海タイムス』は蒙古留学生の「感謝」「感激」を報道している¹⁸⁾。しかし、蒙古留学生は「興蒙」「東亜」の理論を教え込まれたからこそ、あえて大東亜共栄圏のあり方について自ら考えるようになっていった。1944年4月14日付『北海道帝国大学新聞』第265号に留学生馮森楚克巴が書いた文章「蒙古」の中で、蒙古留学生の学力が日本人には及ばないとされているが、それは、自分たちが学問や理論より実務的教育を受けているからであり、日本人の蒙古に対する認識はまだ本当の理解と言えず、そして「大東亜共栄圏の確立するためには大東亜諸民族がお互いに理解し合はなければならない」と呼びかけている。

第2章 中国人留学生のネットワークと取締り体制

第1節 留学生取締り体制

中国人留学生は農学など科学技術の知識を学ぶために北海道帝大に入学したが、彼らの留学の目的は農学だけではなかった。教室以外の様々な場所においても、様々なことを学ぶことができた。留学生にとっては、日本の社会に接触する機会は少なくなかった。見学旅行、アルバイト、新聞、工場実習、卒業後の研修などが挙げられる。

留学生の団体は、最初は出身や派遣の地縁関係で結成した同郷会組織であった。1920年以降、在留地域によって組織された全留日学生の一致団結を目指して、中華民国留日学生同学会及び各地支部が次第に結成されたのである。国家観念より郷党意識が強かった同郷会は一時期、革命思想を広げる主要ルートとなっている¹⁹⁾。

そして、留学生に対する取締りは、最初の自由放任から1930年代以降厳格な監視へと大きな変化が起こり、その変遷は日本国内の思想統制の動向と一致している。その上、中国側の各政権もそれぞれの派遣留学生に対して、独自のイデオロギーを注入している。中国の各政権と日本政府との外交距離の遠近によって、留学生に対する取締りは異なる局面を

見せる。

北海道帝国大学における学生生徒取締りの機構としては、元来置かれた学生監があり、教授または助教授が「総長ノ命ヲ承ケ学生ノ取締ニ関スル事」を兼任する役職であった²⁰⁾。しかし、1928年三・一五事件を契機に、文部省専門学務局内に学生課が設置され、そこから専任事務官である学生主事が帝大の学生課に配置されるようになり、国家が直接、学生運動を抑圧する体制へと転換した²¹⁾。北海道帝大学生課は留学生も含め、すべての学生生徒の思想、集会、福利厚生などをめぐって、学内外調査連絡を担当するのである。留学生にとっては、住所の登録、アルバイトの紹介、学費や旅費支給の申請・受領、日本の官公庁における実習など様々な手続きは学生課を通さなければならないのである。ところが、学生課の役割は福利厚生のみではない。学生課は文部省のほか、道庁警察部と、外務省文化事業部とも定期的な連絡を取り合っている。留学生が入学する前、または補助申請及び卒業就職の時、その人物について素行調査をする。

学生課の日常的な業務としては、各学部に在学留学生の出欠、成績、生活調査、新入生募集方法に関する規定などを調査させ、その結果を外務省、文部省、警察署（さらに内務省）、日華学会、駐日公使館に報告すること、留学生の時局に対する認識を聴き取り、不穏な言動を注意すること、また留学生宛の郵便物を検閲すること、外部から来学の視察団を接待し、留学生と彼らとの接触を監視することなどが挙げられる。

文部省の思想統制の末端機関である学生課の「訓育」は、日本の国家政策に一致し、また特に満洲国政府にも協力的な姿勢を示している。全体的な傾向として、戦前は主に共産主義、戦時は留学生の対日抵抗意識も加えて警戒する。学内に置かれた学生課以外にも、学外において、留学生の一般的な違法行為と思想問題を調査、監視する警察もいた。

第2節 留学生ネットワークの形成と取締り強化

前述の通り、留学生が活動する場は大学のキャンパスだけではなく、連絡のネットワークも北海道帝大の内部には限られなかった。ここで、北海道帝大の中国人留学生に見られる各種ネットワークの形成をみると、大まかに三つの時期があげられる。

第一は、留学生が北海道に来る以前、東京において予備教育を受ける時である。例えば、札幌農学校・東北帝大農科大学の時代は、ちょうど清末民初の留学生が民主革命の思想を中国国内へ持ち込んだ時期にあたる。東京は運動の中心になっているが、その思想は札幌まで広がってきた。1905年に東京で中国同盟会が成立する当初、東京弘文学院で日本語を学ぶ陳遼、萬勗忠は孫文と出会い、同盟会に参加した。2人とも1907年に農科大学に入学し、1911年辛亥革命の時、まだ在学中の陳遼はそれに参加するために、一時帰国してから、再度、卒業まで学んだ²²⁾。

第二は、見学旅行である。外務省文化事業部は、毎年卒業見込みの留学生に対し、公費・私費留学生を問わずに、見学旅費を支給する。学生主事が引率することになっていたが、日程にはほかの帝大の留学生との懇談会も設けられるため、交流には絶好の場であっ

た²³⁾。この見学旅行は戦時中も続けられ、時には小樽高等商業学校や函館高等水産学校の留学生も同行を許可されることがあった。

第三は、外務省文化事業が提供する日本の各官庁試験所での実習である。留学生が卒業した後も補助を受けながら、実習の名目で日本に滞在できる。そこで、異なる出身校の留学生と知り合い、影響を拡大することができた。

北海道帝大はほかの帝大と比較すれば、学部を卒業するまで留学生の在学期間は長くなっている²⁴⁾。そして、勉強より左翼運動に熱中する留学生にとっては、入りやすい実科と専門部の存在は都合がよかった。取締りの難度が高かったのである。

もう一つの難問は、そもそも、留学生が本国政府の監督を受けなければならなかったことである。大学は日本政府のみならず、中国側からも様々な要求をなされる。

1908年2月卒業見込みの清国留学生数名が東京に滞在する間に、人身事故が起こった。公使館留学生副監督の手紙によれば、事件の経過は、東京で病気療養中の農芸科留学生張幹庭が鉄道に飛び込み自殺したが、見付かった遺書には、自殺理由は王之鑑に革命党だと告発・中傷されたからであると書かれていた。ほかの留学生の告発もあった²⁵⁾。翌3月に公使館留学生副監督は学生監に対して、王之鑑を退学させるよう依頼した。しかし、学生監が調査した結果は「王之鑑ハ往来又現今トモ毫モ私徳ヲ損スル事実ヲ認メ難ク」、結局学科主任の協議会において無記名投票を行ない、一五対一の結果で王の卒業を認め、留学生副監督の要求を拒絶した²⁶⁾。要するに、「特殊重大事件ナクシテ軽忽ニ退学セシムルハ学則上取扱兼ネル」ので、外国政府でも「学則」を超越することはできないからである。

1928年までの北海道帝大は、留学生にとっては比較的寛容な環境であった²⁷⁾。中国人留学生は「社会科学研究会」と「中華留日北海道帝国大学同学会」を通して、日本中の中国人留学生と連絡をとることができたのである。しかし、三・一五事件以降、思想関係をめぐる取締りが一層強くなり、北海道帝大の中国人留学生の活動の様子は、北海道庁外事課を通じて、外務省に通報されている²⁸⁾。

しかし、意図的な謀計であるかどうかはわからないが、その時に通報された要注意の留学生のうち、4名の文化事業補助受給生は、「学習ノ一環」として、1929年3月に農学・林学実科を修了した後、農林省の農事試験所や林事試験所で実習していた²⁹⁾。10月にそこで「中国共産党東京支部事件」のため検挙された。起訴書は、1925年頃社会科学研究会の活動から、1929年7月に中華反帝同盟の計画まで羅列し、「日本ニ在ル中国留学生ニ対シテ共産主義思想ヲ鼓吹スルトトモニ国民政府打倒ヲ宣伝スルコトヲ目的トスル秘密ノ結社」が治安警察法に違反するとしている³⁰⁾。そして、東京の検挙とともに、札幌においても「外事課が中心となり課長以下総出にて」特高及び札幌署高等係、札幌地方裁判所判検事と協力し、中国人留学生の「家宅捜索を行うと同時に」容疑者8名を検挙した³¹⁾。その後の経緯は不明だが、結局は在学中の8名は無罪となり、東京方面の容疑者も被告になったにもかかわらず帰国できた。この事件を受けて、北海道帝大の中華留日同学会も一旦解消した。再建が実現したのは1937年3月のことである。

留学生の言動を監視している学生課の最大の目的は不穏な思想事件を抑制すること、留学生と日本人学生と、また留学生同士の間の紛争を防止することである。特に満洲国「建国」後、従来は「中華民国」（『北海道帝国大学一覽』の表記は「支那」である）に属する学生に対し、満洲国の建国の理論を指導すると同時、満洲国留学生と中華民国留学生との関係にも配慮している³²⁾。1935年8月、中華民国留学生劉伯文は大学院の課程を修了して帰国する際に、中・満留学生が共同主催の送別会に、学生課員3名も出席していた。ところが、外務省文化事業部以外の補助申請も、見学旅行もそれぞれ区別して行うのである³³⁾。

一方、満洲国政府は留学生に国家精神を涵養するために、日本政府また大学当局の力を借りるようになった。1936年5月5日、北海道帝大には満洲国留学生会北大支部が設立された。その名称を見ればわかるように、日本中の満洲国留学生を統制する組織の末端の一つである。学生課は毎年、満洲国の建国祝賀会を開催する。

また、北海道帝大の軍事教練には、約半数の満洲留学生が参加しているが、1937年11月より、満洲国外交部令「留日学生指導要領」によって、満洲国留学生に軍事教練を実施することになっている³⁴⁾。北海道帝大軍事教練科は「欣然之に応じ」、「一般学生生徒とは別に留学生のみ集合して受ける事」といったような実施方針を定め、本格的に実施し始めた³⁵⁾。

もちろん、中華民国留学生も本国より指導を受けている。満洲国留学生会北大支部設立後、彼らは再び「北海道帝国大学中華民国留日同窓会」の結成に努力した。学生課は警察署外事係と相談し、彼らから10ヶ条の規約を取り付けた上で、同窓会を認可した。そして、彼らは留学生だけではなく、北海道内における華僑コミュニティーにも影響を与えている。従来、華僑は函館を中心としたが³⁶⁾、1937年5月に札幌において「中華商会」が成立した。在函館総領事羅集誼は在留の行商人や料理人に対し、「李春材ノ農学実科留学生命ハ領事ノ命」と指示し、李に「絶対的指導者」の地位を与えた³⁷⁾。中華民国留学生は領事から指導を受けて、また華僑団体を指導し、北海道における各階層の中国人の「親睦」を求めている。

学生課は中華民国留学生のそれを認可したとしても、二つの政権は留学生に対する要求は異なるので、学生課の仕事の分量も異なる。学生課は、満洲国留学生が満洲国政府に就職するように積極的に斡旋し、留学生が公主嶺農事試験場へ実習に行く時も協力した³⁸⁾。その後に来た蒙古留学生も、満洲国留学生のような待遇は受けていない。要するに、日満は「一体」であることに対し、中華民国や蒙疆政権などは「善隣」に止まっているのである。

北海道帝大のモンゴル人留学生の実態については、田中剛の詳細な研究では、モンゴル人の民族意識の覚醒が指摘されている³⁹⁾。しかし、蒙古留学生が北海道帝大に入学する1939年以来、日本の中国占領政策は絶えず変化し、1940年南京で汪兆銘政権を樹立させることとなった。学生課はまた学内に中華民国、満洲国、蒙疆政権に所属する留学生に対して、新政権の正当性を強調した。1939年、「蒙古留学生」という名称が指す範囲も変化した。

最初は完全にモンゴル人留学生であったが、1940年より、山西省北部の13県出身の学生も蒙古留学生として派遣されるようになった⁴⁰⁾。また、蒙古留学生の予備教育を担当する学校は東京の善隣商業高等学校があるが、経費を節約するため、自治政府の「首都」張家口に蒙古高等学院を設立し、卒業生全てを師範教育もしくは農学教育のために日本へ送る計画であった。元留学生席占明氏の回想によれば、そこで、一つのクラスの50名のうち、モンゴル民族が40名、回民族（ムスリム）は1、2名、残りは漢民族というような割合で生徒が募集される。1944年最初で最後の卒業生を日本に送り出した。要するに、モンゴル人留学生でも事前の教育段階や生活の中で、漢民族やほかの民族と接触することが多かった。それ故、日本に留学する間も、民族問わずにコミュニケーションが盛んであった。特に終戦が迫った時期、食糧配給のもとで、生活状況は一層苦しくなり、北海道帝大の場合は、毎日の昼食は学食で採る。寮や下宿は特高の監視が厳密なので、学食は留学生が簡単な会合をできる場所であった。弁当を食べ終わったら、相互に情報や意見を交換することである。満洲、中華、蒙古の区別なく、民族を問わずに、中国語で意思疎通した。

地域や民族を超えた団結には、蒙古、中華、満洲の留学生のみならず、朝鮮人学生も加えている。媒介になったのは満洲国派遣の朝鮮人留学生である。戦前の満洲、主に間島地域に移住した朝鮮人である。満洲国においては、朝鮮人留学生を「満洲国構成分子の一として満洲留学生として」取り扱う傾向があった。それに関しては、外務省は「文化事業部ノ学費補給申出ノ場合ニハ考慮スル」態度を示しているが、朝鮮人学生は日本国籍の故、「偶々満洲国ニ在ル為ニ内地人子弟ノ享有セヌ特典ヲ与ケル訳トナル要スルニ右ハ文部省ノ研究ニ委スコト」と決定した⁴¹⁾。それでも、満洲国民生部の補助は受給可能である。

1943年頃、6名の朝鮮人留学生が治安維持法違反で朝鮮人憲兵に検挙され、札幌地方裁判所で最大2年の懲役を求刑された⁴²⁾。この事件の「首謀者」張宗源ともう1人孫膺龍との2人は、満洲国派遣朝鮮人留学生である⁴³⁾。下宿の「北栄館」で朝鮮独立を希求する15名ほどの朝鮮人留学生と読書会を開き、日本を批判した。方針の一つは満洲国派遣の朝鮮人留学生を集結し「中国人留学生の友情を通じ」、「支那ノ援助ヲ受」け、日本に関する情報を収集して、韓国の独立運動を指導、支援することである⁴⁴⁾。

「北栄館事件」以前の左翼学生運動では、朝鮮人学生は日本人学生との連携が見られたが⁴⁵⁾、中国人留学生との交流の有無は不明である。特に1941年以降、多くの朝鮮・台湾の留学生は名前を日本式に変えたので、中国人留学生にとっては判断は難しく、交流もほとんどなかった⁴⁶⁾。しかし、満洲国派遣朝鮮人学生の存在は、彼らの繋がりや結節点となっていると評価するべきである。

おわりに

本論文では、異文化接触の側面から中国人留学生の勉学実態を解明して、学内外における留学生の組織や活動及び取締り状況を述べてきた。

留学生は、受動的に教育を受けるのみではなかった。北海道帝大の留学生対策による帝国の価値観を受容させられただけでなく、自主的な思考も見られたのであり、さらに反対に満蒙研究会において北海道帝大が必要とする知識を与えたのである。

北海道帝大における留学生の取締りは学生課が担当した。留学生に関わる学内外各機関と連絡し、勉強、就職、日常生活及び思想問題など各方面を及んだ。北海道帝大学生課は文部省の末端組織として、警察との連絡も緊密で、中国側の要求も1928年以前の教授を中心とする取締り制度と性質がずいぶん違った。教員の場合は学力を第一に重視しており、政府に従わずに独自の教育方針を採り、自主性を有していた。

共産主義思想を抑圧するために、中国人留学生に対する取締りは自由寛容から強制統制の方向へと変遷した。日中戦争勃発後、日本政府が国策として遂行した思想善導の目標は、中国人留学生にも日本の政策を受け止めさせて、協力者を養成することであった。それ故、各政権に所属する留学生に対する取締りは異なる側面を呈していた。しかし、留学生の間に、政権、民族を超えたネットワークが終始存在しており、その目標は空振りに終わったとも言える。

中国人留学生にとっては、戦前は学外においても、日本各地の中国人留学生と、北海道内の華僑との間にネットワークが結成されていた。技術系が長所とされる北海道帝大の留学生も見学旅行、実習などを通して、日本社会に対する認識を深めていた。こうした異文化交流の体験は、大学で学んだ知識とともに、彼らが留学から獲得した貴重な経験であった。

〔注〕

- 1) 本論文で主に引用する同窓会誌・学内誌は、札幌同窓農友会（農芸科）発行の『農友』（第19号までは新聞で、20号以降は雑誌）と『同窓農友会々報』、札幌農学校文武会発行の『文武会雑誌』と『文武会会報』、『北海道帝国大学新聞』（復刻版、大空社、1989年）。
- 2) 「農芸科時事 清国留学生入校」、『農友』、第31号、1903年6月25日付、20頁。
- 3) 原文は「成業之後帰資国用其利不可量也而我校声誉与焉不亦乐乎」。「清国留学生入学歓迎会」、『農友』第32号、明治36年7月25日付、24頁。
- 4) 前掲『農友』第19号。
- 5) 「清国留学生を迎ふ」、『文武会会報』第44号、明治38年1月10日付、22頁。
- 6) 「清国留学生歓迎会」、『同窓農友会会報』第37号、明治37年12月、38頁。
- 7) 『文武会雑誌』第38号、明治35年6月28日付、70頁、『文武会会報』第43号、明治37年7月7日付、17-18頁、前掲『文武会会報』第44号、26頁。
- 8) 初期留学生の日本語能力については、同窓会誌の紹介文によれば、周忠緯「彼は邦語に甚た暗かりし」（前掲『文武会雑誌』）、呉超「国語邦文を操るを得」および屠師韓「漸く五十音を書するを得のみ頃日」（『農友』第31号、20頁）、高平「目下大抵の談話には差支なし」（『同窓農友会会報』、第36号、明治37年8月20日付、40頁）。1904年谷井引率の21名のうち16名は本国の学校で日本人教師に従い、日本語を勉強したことがある。それ以降の清国留学生は概ね、東京の予備学校で日本語と基礎知識を勉強してから入学した。

- 9) 『同窓農友会会報』、第35号、明治35年1月31日付、15頁、第36号、明治37年8月20日付、28頁。
- 10) 『文武会々報』第52号、明治40年12月。
- 11) 北海道大学125年史編集室編『北大の125年』、2001年、25頁。
- 12) 「戦跡と文化状態視察の満鮮旅行」、『北海道帝国大学新聞』(以下『帝大新聞』と略記)、第40号、昭和4年5月6日付。
- 13) 「夏の満鮮見学団 主として満洲国を視察」、『帝大新聞』、第96号、昭和7年7月5日付。
- 14) 「満蒙研究会趣旨」、『帝大新聞』、第98号、昭和7年9月20日付。全文は以下の通り。

我等は一個の学徒たる立場を深く省みて、常に學術研究の態度を失ふことなく、諸学の総合的並に分化的研究に依り、正しく且濃やかに、満蒙の諸事情並に東亜を繞る世界の趨勢を批判、研討し徹底せる認識と妥当なる結論とを誤まらず、以て日滿興隆、復興亜細亜の先嚮に資せん事を期するものである
- 15) 「満洲語講習 満蒙研究会」、『帝大新聞』、第118号、昭和8年11月28日付、最初の講師は張際中(公主嶺農学校出身)、王仲彦、關増祿(熊岳城農業学校出身)の3名である。
- 16) 上原轍三郎「満洲国とわれ等の使命」、『帝大新聞』、第93号、昭和7年5月17日付。
- 17) 「支那語講習会開催」(昭和13年5月)、帝大簿書00024、北海道大学大学文書館所蔵。支那語も満洲語も北京官話のことを指す。
- 18) 「未来指導者九名エルム学園へ蒙古留学生けふ来札」『北海タイムス』、1939年4月16日付。
- 19) 実藤恵秀『中国人日本留学史』、くろしお出版、1960年、511頁。
- 20) 北海道大学『北大百年史』通説、ぎょうせい、1982年、252頁。
- 21) 荻野富士夫、『戦前文部省の治安機能——「思想統制」から「教学練成」へ』、校倉書房、2007年、38-39頁。
- 22) 陳振樹「中国樹木分類学的奠基人——陳辽(1888-1971)」
http://www.gmw.cn/content/2005-06/10/content_248785.htm
ほかの四人は1905年入学した山東省出身の留学生張伝一、史沢咸、張正坊、韓澍凝である。上京後、山東省同郷会の媒介を通して、同盟会に参加した。
- 23) 例えば、1940年1月に実施した満洲国留学生見学旅行は札幌から出発後、東京、奈良、大阪、九州、京都、名古屋などを經由する日本一周ともいべき行程で、内容とは神社参拝、登山、観劇、工業展覽館と他帝大の学内施設の見学などが挙げられる(「留学生内地見学旅行ニ関スル件」外務省記録H.6.1.0.5-1『在本邦留学生本邦見学旅行関係雑件 補助実施関係』第12巻)。なお留学生が書いた見学旅行報告は学生課が清書し、外務省に発送する。
- 24) 許晨、前掲論文、40頁。
- 25) 寮関係資料00139、北海道大学大学文書館所蔵。
- 26) 「清国学生王之鑑退学ニ関スル照会ノ件」、寮関係資料00120、北海道大学大学文書館所蔵。
- 27) 宣堯火(1921年に水産専門部入学)は、最初にマルクス主義と接触した場所は北海道帝大で、マルクス主義の書籍を読むのは、「真夏に氷を噛むようにすっきりした」と述べた。
<http://www.sxda.gov.cn/users/dsrw/xxf.htm>
- 28) 「中華留日北海道帝国大学同学会役員改選ノ件(昭和四年)」外務省記録H.7.2.0.5『外国人往来関係雑件』第6巻。
- 29) 外務省記録H.5.1.0.1-9『在本邦一般留学生補給実施関係雑件 実習所関係』第2巻。
- 30) 「被疑者予審決定三十六名」外務省記録H.7.1.0.9『共産党並同党関係者ノ検束及退去処分関係雑件』。北海道帝大関係者検挙された4名は林学実科出身李士映、朱大鼎、周其湛及び農学出身湯雨霖である。
- 31) 『北海タイムス』1931年2月17日。

- 32) 1935年頃、中・満留学生に対する思想教育方針とは、「国際時局に関する正しき認識を知得せしめ、日、満、支の三国は共に同種善隣として相扶け以て東亜の健全なる発展、延ては世界平和に貢献すべき大使命を有することに関して覚醒せしむる様指導訓育すること最も切なりとす」ことである（内務省警保局編『外事警察概況』第1巻昭和10年、不二出版、1987年、52頁）。
- 33) 見学旅行の分別は、ほかの帝大にも同様に見られる。例えば、京都帝大1936年の留学生見学旅行は、満洲国留学生は佐々木学生主事補引率で10月12日に来学し、中華民国留学生は鈴庄書記引率で14日に来学した（帝大簿書00056、「日誌 自昭和九年十月至昭和十二年度 北海道帝国大学学生課第二係」）。
- 34) 満洲国外交部令「留日学生指導要綱」の内容は以下の通りである。

第一 要旨

満洲国留日学生は将来国家の中堅として指導的任務を負荷すべきものなるを以て、其訓育の如何は建国進展の上に重大なる影響あるや論無し

茲に於て之等留学生を統合して指導訓練を与へ、満洲国建国精神の普及、徹底を図り且日満関係を深刻に理解せしめ、以て本来の修学目的を達成せしむると共に、一面不純の策動より防護し所謂日満両国一体観を把握せしめ以て両国結合の楔子たらしむ。

第二 要綱

其一、指導目標

- (イ) 国家的精神ヲ養成ス
- (ロ) 日満一体観ヲ養成ス
- (ハ) 民族協和ノ精神ヲ涵養ス
- (ニ) 犠牲奉公ノ精神ヲ涵養ス
- (ホ) 団体的精神ヲ涵養ス
- (ヘ) 勤労精神ヲ涵養ス

其二、指導要領

- (イ) 留日学生ノ指導ハ大使館学務処之ニ當リ或ハ計画的ニ或ハ機会的ニ汎有方法ヲ講ズルモ、特ニ満洲国留日学生会館、同協和会、陸軍、文部、外務、学校当局就中学校配属将校ト密接ニ連絡シ其ノ協力援助ヲ受クルモノトス
- (ロ) 学生ヲシテ留日学生会ヲ結成セシメ之ガ指導ヲナス
- (ハ) 留学生ハ学校教練ヲ受ケシム
- (ニ) 留学生ノ団体的訓練ヲ行フ
- (ホ) 留日学生ノ塾的修養ヲ行ハシムル如ク指導ス
- (ヘ) 留学生ノ学習状況、思想、素行等ニ就キ調査シ其指導ヲ適切ナラシム
- (ト) 留学生ノ身上相談ニ応ジ之ヲ保護ス

以上に基づき、10月13日から18日にかけて、文教部、蒙政部其他が大使館内に於て打合会を開催し、「軍事教練ノ即時厳格ナル実施ハ却ツテ実行不可能ノ結果ヲ生スヘシトノ各学校主事ノ意見ニ基キ漸進主義ノ立場ヲトルコト」と決定した（内務省警保局編『外事警察概況』第2巻昭和11年、46頁）。

- 35) 「満洲国留学生に軍事教練を実施 本国の指令で急に具体化」、『帝大新聞』第171号、昭和11年11月3日。
- 36) 北海道の華僑については、「一八五九年函館開港後、海産物を買付けるため、一八六七年に華商が進出してきた。一九一四年中華会館が建築された。」「北海道、樺太在留華僑全体、」省別を問わず利用できる。従来は函館を中心にした（日本華僑華人研究会・陳焜旺主編『日本華僑・留学生運動史』、日本僑報社、2004年、38頁）。
- 37) 前掲帝大簿書00056、1937年2-5月。
- 38) 「一九三七年農実二年宋延武ヨリ公主嶺農事試験場ニ於テ一週間（七月十日七月十六日）羊ノ飼養

実習方」、前掲帝大簿書00056。

- 39) 内蒙古自治運動のための人材養成と日本留学との関連という視点から徳王と日本の協力関係を力説している。
- 40) 前掲、譚克儉「抗日戦争时期的山西赴日留学」によれば、山西省公署も1940年より日本へ留学生を派遣し始めた。それ以前は北京臨時政府より公費生の定員を配分されたが、「淪陷区」の学校体系は崩壊したので、派遣はできなかった。しかし、もし蒙疆政権の中学に在籍すれば、蒙古留学生の定員で留学はできる。
- 41) 「満洲国派遣鮮系留学生取扱方針」、外務省記録H.5.2.0.1-1 『在本邦特選留学生補給実施関係案件ノ方針関係』第2巻。
- 42) 河野民雄編著『「治安維持法」下の北大生の抵抗運動』、富士リプロ、2008年、103頁。
- 43) 張宗源(張本宗源)は間島竜井育ち、本籍が朝鮮咸鏡南道で、咸鏡北道鏡城高等学校卒業後、1936年11月満洲国留日学生試験に合格、東京高等獣医学校を経、1941年北海道帝大農学部を選科生として入学し、1943年農学士取得後、満洲国大同学院に入学予定であった(『思想月報』第109号、1944年4-6月)。
- 孫膺龍(廣田膺龍)は咸鏡北道鏡城生まれ、間島の竜井光明中学校卒業後、宇都宮高等農林学校を経、1942年北海道帝大農学部を選科生として入学し、「北栄館事件」で検挙された。終戦後釈放されて、特別卒業とされた。農学士。後に韓国高麗大学教授になった(http://society.kisti.re.kr/~kscs/1s_4.html 韓国作物学会サイト)。
- 44) http://www.mpva.go.kr/open/open300_view.asp?ID=13390 韓国政府国家褒勲処サイト。前掲、『思想月報』第109号。
- 45) 例えば1930年6-10月頃の朝鮮人学生社研事件の金再学は日本人学生草野茂、柳田敬三らとともに『戦旗』配布などの左翼活動をしていたことが検挙された(河野民雄、前掲書、45-46頁)。
- 46) 筆者による席占明氏に対するインタビュー(2008年11月2日 札幌市豊平区中華書店にて)から。
[北大の中国人留学生と朝鮮人との間に、コミュニケーションはなかったのでしょうか]
席占明：ありませんでした。
[当時、誰が朝鮮人なのかをっていましたか]
席占明：朝鮮人はみんな日本式の名前でしたから、台湾人学生もそうですし、中国人と同胞ですが、自由に付き合うことができませんでした。戦後初めてこの人が台湾人、その人が朝鮮人であることを知って、自由に会話するようになりました。戦前なら、特高の監視がありましたので、無理でした。

※本論文は、「北海道帝国大学の中国人留学生」(『北海道大学大学文書館年報』第5号、2010年3月、27-63頁)と共に、修士論文「北海道帝国大学の中国人留学生」(2008年度、北海道大学大学院文学研究科提出)の一部を構成し、若干の加筆・修正を加えた上で掲載した。

(きよ しん／北海道大学大学院文学研究科修士課程修了)